

関連性と英語イントネーション

岡田 聡 宏

[キーワード：1 COMMUNICATION, 2 RELEVANCE, 3 DEFAULT VALUE, 4 UNCERTAINTY]

序

本稿^①における分析は機能を重視した語用論的分析であり、様々な事象を一般言語理論である関連性理論^②を用いて説明するものである。したがって従来のイントネーション分析とはかなりの相違がある。本稿ではこれらの相違点を明らかにすると共に、音調の差と発話の関係によって生じる複雑な意味を如何に話し手が伝達し、聞き手がそれを理解するかを関連性理論を用いて説明したいと思う。

まず発話における抑揚型は、個々のピッチアクセントの配分によって決定されるという点を明記しておきたい。つまり部分が全体を決定するということで、その部分部分であるピッチアクセントの配分は関連性の原則によって決定されるのである。本論ではイントネーションに関しても、他のコミュニケーションにおける現象と区別することなく、コミュニケーションの一形態として分析可能なのである。つまり、イントネーションにおいても、話し手は聞き手にとって関連性が高いと信じるような方法でピッチ

アクセントを選択・使用し、聞き手の側も話し手がそうしているであろうと信じることによって意味解釈を行なうと考えられるからである。

1 基本音調について

従来分析では、様々な音調に様々な意味を付与してきたが、実際には基本音調は下降と上昇の2つのみであり、まさにこれらの配分によって意味の相違が生じてくると考えられる。上昇調には、発話中で何かの形で関係するものに対して UNCERTAINTY を示す機能がある。またこの点において、HIGHER-LEVEL EXPLICATURE に貢献するものと考えられる。重要なことであるが、この場合、UNCERTAINTY は必ずしも文の命題に対して示されるとは限らず、それぞれの文脈によって大いに左右されるのである。もちろん、話し手が何に対して UNCERTAINTY を示しており、またそれが如何に発話に関係しているかを決定する鍵となるのが関連性の原則である。ここで関連性理論について簡単に触れておきたい。コミュニケーションにおいて話し手は聞き手に relevant であると思う考えを伝えようとし聞き手は相手が relevant であろうとしていることを信じ、関連性の原則に一致する解釈を求めようとする。関連性とは以下に示すように文脈効果とそれに対する処理努力という2つの概念によって特徴づけられる。

- (1) (a) Other things being equal, the greater the cognitive effect achieved by the processing of a given piece of information, the greater its relevance for the individual who processes it.
- (b) Other things being equal, the greater the effort involved

in the processing of a given piece of information, the smaller its relevance for the individual who processes it⁽⁹⁾.

端的に言うと、人間はなるべく少ない労力で最大の文脈効果をあげようとするのである。文脈効果とは、相手の認知環境に影響を与えるような効果で文脈含意、強化、矛盾の3つが考えられる。またコミュニケーションを行なうということはその情報が相手の注意をひくに十分関連性があるということの意味するものであるから（そうでなければ聞き手はその情報に注意を向けない）如何なる発話も相手に対して「最適な関連性の見込み」を伝達する。これを「関連性の原則」と呼ぶ。

話を再び上昇調に戻すが、発話が上昇調で行なわれた場合、文の命題は次のような形で HIGHER-LEVEL EXPLICATURE として表されるのである。

(2) [HIGHER-LEVEL EXPLICATURE]

The speaker is saying with uncertainty that——.

これから聞き手は推論を行い、さらなる文の意味解釈を行なうものと考えられる。詳細については後に具体的を似て触れることにする。

下降調に関しては、一般的に completeness や assertion 等の意味を表すとされてきた。例えば、Bolinger (1986) は、*Profile A* について次のように主張している。

It [Profile A], along with its congeners CA, AC, and CAC, figures as the ASSERTIVE profile par excellence, and when a

linguistic description leans heavily on propositional logic as most such descriptions do, assertion plays a central role. The assertiveness of A is evident in its physical shape : the accented syllable is, more often than with any other profile, at the highest pitch, where it has greatest impact. One might say that it dominates the landscape⁽⁴⁾.

Cruttenden(1986)も平叙文において下降調が使われた場合には, 'a sense of finality, of completeness, definiteness and separateness'⁽⁵⁾等を表すとしている。Gussenhoven (1983)は下降調について, 'The speaker may add the Variable to the background'⁽⁶⁾という定義をしている。河野(1994)は,「関連性」はモダリティによって表されると仮定し,「*R*が関与する発話内行為と抑揚型との間には相関関係があり,基本的に,*R*の<主張>と下降調(または下降調を主成分とする複合的音調形)が対応し,*R*の<質問>と上昇調(または上昇調を主成分とする複合的音調形)が対応する」⁽⁷⁾と主張している。この論によると,平叙文において下降調が使われる場合,発話の構造は次のようになる。

- (3) i) I say that it is *p*; and
ii) I say that *p* is *R*⁽⁸⁾.

しかし本論では,前述の通り上昇調の基本的意味は UNCERTAINTY であり,下降調はその DEFAULT VALUE あるいは, UNMARKED VALUE であると定義している。このような考え方は,主に,今井(1993), Quirk *et al.* (1985), そして, Knowles (1987) によって支持されてい

る⁽⁹⁾。ここで重要なことは、下降調は上昇調が不必要あるいは不適當と思われる時に使われるということである。したがってこの音調は上昇調分の処理をまぬかれるために、処理に使われる労力はより少なくて済むとも考えられる。次にこの DEFAULT VALUE としての下降調について詳細を記したいと思う。

2 下降調(DEFAULT VALUE)

下降調は「断定」や「主張」等を意味するという従来 of 主張に対して、ここでは下降調は DEFAULT VALUE を表すものと定義している。この主張が正しいことは、次の例を見ても明らかである。

(4) He was my friend, faithful and just to me;

But →Brutus →says he was am \bitious,

And →Brutus is an →honourable \man.

He hath brought many captives home to Rome,

Whose ransoms did the general coffers fill;

Did this in Cæsar seem ambitious?

When that the poor have cried, Cæsar hath wept;

Ambition shold be made of sterner stuff.

Yet →Brutus →says he was am \bitious ;

And →Brutus is an →honourable \man.

(Julius Cæsar, III-2)

アントニーは「ブルータスは高潔の士である」という文の命題自体に対

して断定を行なっている訳では決してない。もし断定をしているのであれば、この発話はアイロニーとして機能しなくなってしまう。聞き手（読み手）の方にもアントニーの明解な説明等からこの発話がアイロニーとして使われていることが分かる。したがってこの下降調も上昇調では不適当なために使われたもので、まさに DEFAULT VALUE を表しているのである。このような例は河野 (1994) を含めて、他の分析法では説明できない。

また、つぎの例文はワーズワース (William Wordsworth) からのものであるが、これも伝統的分析の反例として挙げるができる。

- (5) I →wander'd →lonely as a \cloud |
That →floats on →high o'er →vales and \hills, ||
When →all at ↗once | I →saw a \crowd.
A \host | of →golden \daffodils, ||
Be→side the →lake, be→neath the \trees ||
→Fluttering and →dancing in the \breeze ||.

途中上昇調が使われているが、これは「相手が持つであろう完結性に関する想定」に対して UNCERTAINTY を示すもので、未完を表すために用いられていると考えられる。この用法は次のように何かものを列挙する時によく使われる。

- (6) We have ↗beer, ↗gin, ↗Scotch, and \wine.
(7) A : What else?
B : He always wore an ↗overcoat. He had white ↗hair...and
he always carried an umb\rella.

再び(5)の例文に話を戻すと、これは詩の朗読であるためコミュニケーションの一例とは言えない。したがって、何かを主張している訳でもなければ、新情報を伝えている訳でもない。

平叙文ではないが、次の例も伝統的な考え方では説明できない。

(8) Doolittle : Thanks for your hospitality, George. Send...

George : Yes, I know. Send the bill to\ Buckingham Palace.

(*My Fair Lady*)

この発話の話し手である George は、Doolittle が言おうとしていることを予想して、Doolittle が話す前に「つけはバッキンガム宮殿にまわしてくれ」と言っているのである。これも無論自分の考えではなく、むしろ相手の言いたいことなので彼に向かってこの文を使っている訳ではない。したがって、ここで使われている下降調の意味も DEFAULT VALUE 以外には考えられない。

以下の例文は独り言である。したがって、これも相手に何かを伝達しているとは考えられない。

(9) A : Well, just give me somethin' without any sugar in it, okay?

B : Somethin' without\sugar.

(10) What am I\thinking of?

このように、従来の分析では説明のできない例が数多く存在する。しかし本論ではこれらの例を問題なく扱うことができるのである。次に、2つの基本音調と関連性理論による具体的な分析を試みたいと思う。

3 上昇調 (平叙文)

前に述べたように、話し手が何に対して UNCERTAINTY を示しているかは文脈と関連性の理論によって決定されるのである。まずは、より単純な例から考察することにする。

(11) A : Which is the highest mountain in Africa?

B₁ : Kiliman\jaro.

B₂ : Mt. /Kenya.

「アフリカで一番高い山は」と聞かれて、答えに自信がある場合は、UNCERTAINTY を示す必要がないので 'Mount Kiliman\jaro' のように DEFAULT VALUE である下降調を使うのである。これに対して、答えに不安がある時には、B₂ のように 'Mount /Kenya.' と上昇調を使って答えることが多い。これは、命題自体の真偽性に対して、UNCERTAINTY を示しているからである。聞き手の側も、関連性の原則に基づいてこのことを理解し、相手がこの答えに自信を持っていないと考えるのである。つまり、これが関連性の原則に一致した解釈なのである。次の例も相手の考えを（結局は失敗作であるが）自分の発明した機械によって読もうとするのであるから、やはり内容の真偽性に関して UNCERTAINTY を示していると考えられる。

(12) (I'm gonna read your thoughts. Let's see now.) You've come here from a great/distance.

念のために記しておくが、この発話に対して相手が何か答えようとする
この話し手は、‘Please, don’t tell me!’ と続けているので、これは疑問
ではない。

次の例文は、O’Connor & Arnold (1973) からの引用である。彼らの
分析は優れたものではあるが、重大な問題点としては、ひとつのイントネ
ーションパターンに様々な意味を付与したということが挙げられる。事実
イントネーションにそのような複雑な意味があるはずはなく、それらの意
味はすべて文脈と音調の核となる意味から派生すると考えられる。次の例
文においても(13)に関しては「遠慮がちに反対」(14)に関しては「憤慨し
ながらの反対」と定義しているが、これらの意味も文脈との関連なしには
考えられない。

(13) A: I shall have to sack him.

B: You can’t do /that⁽¹⁰⁾.

(14) A: You haven’t written that letter.

B: Yes, I /have⁽¹¹⁾.

(13)においては例えば、Aが上司であるとする、反対意見をいうのにも
下降調で直接的に言うのは失礼になるので、上昇調を使うことにより
UNCERTAINTYを示すのである。前述の通り、UNCERTAINTYが何
に対して示されているかを決定するのは、もちろん関連性の原則である。
この例の場合、UNCERTAINTYの作用域は、「この意見を述べる権利が
ある」ということであり、このことに対して話し手はUNCERTAINTY
を示しているのである。このように直接表現を避けることによって、表現
が丁寧になり、聞き手の側も話し手が控えめに反対をしているということ

を理解するのである。つまりこれが関連性の原則に一致した解釈となる訳である。(14)ではAが「君は手紙をまだ書いていないじゃないか」と非難しているので、Bの上昇調は相手の判断が正しいかに関して UNCERTAINTY を示していると考えられる。この場合、遠回しに言うことによって、却って強い反対の印象を与えることになり、聞き手の側にも相手が自分の意見に憤慨をもって婉曲的に強く反対しているということが分かるのである。これが関連性の原則に一致した解釈であると言える。

上記の例でも明らかなように、上昇調の場合下降調に比べ婉曲的になりがちなので、その分の処理労力がかかると考えられる。しかしその労力を相殺するかたちで非常に微妙な複数の効果が得られるので、やはり関連性が高いと言える。例えば、(13)を見ても分かるように、反対する場合でもためらいや遠慮あるいは丁寧さ等複数の微妙な意味合いを同時に示すことが可能である。このように複数の効果が得られる場合、強い推意だけが得られるのではなくて、むしろ多くのより弱い推意が得られるのである。つまり、このようなコミュニケーションを weak communication と呼ぶ。

We might think of communication itself, as a matter of degree. When the communicator's informative intention involves making a particular assumption strongly manifest, then that assumption is strongly communicated. When the communicator's intention is to marginally increase the manifestness of a wide range of assumptions, then each of them is weakly communicated⁽¹²⁾.

(下線は筆者による)

このように、話し手が弱く伝達するものは、やはり弱く伝達され、1つの形に限定できないのである。上昇調を用いた発話の多くも、この「弱い伝達」の一種と考えられるので、具体的な1つの形で解釈を表すことはできないのである。また、このようなコミュニケーションの場合、弱く伝達される分、解釈における聞き手の責任も重くなるのである。

弱い伝達の話はこれまでにして、次の例の分析に移ることにする。これは、注射を恐がっている患者に対する医者が発話とを考えてもらいたい。

(15) I→shan't /hurt you.

「痛くないよ」ということを医者が信じていることは疑いのないことであり、この命題に対して上昇調が使われているとは考えられない（もしそうであったら、患者がかawaiiそうである）。この文の命題自体に対しては下降調の変異形である‘→’が使われている。つまり命題内容は UNCERTAINTY を示さずに述べられるべきものであるからである。それでは上昇調の作用域はというと、この発話をする事自体の必要性に関してであり、これに対して修辭的に UNCERTAINTY を示していると考えられる。こうすることにより、「痛くないということは言う必要もないほど明らかですよ」という感じを相手に与えるのである。

次の(16)はいわゆる「いじめっ子」と「いじめられっ子」との会話で、二人の力関係は歴然としている。

(16) A: ... I'd get fired. You wouldn't want that to happen, would you? would you?

B: Of\course, not. Now→I wouldn't want that to /happen.

AはBに修辭的に否という答えを期待しており、果たしてBも‘Of \ course, not’と下降調で答えている。しかし、ここでさらにもう一度相手の言ったことを繰り返していることに注意されたい。これはいわば余剰的なものでありそれを上昇調で言っているので、UNCERTAINTYはこの発話すること自体の必要性に対して修辭的に示されていると考えられる。その結果、「私が申し上げる必要がないほど、そしてあなたをご存じの通り、明らかなことですよ」といったニュアンスを相手に与え、媚び諂った表現となっているのである。

4. 上昇調（疑問文・命令文）

上昇調は一般に疑問文を表すのに使われると言われているが、疑問文かどうかは統語構造によって決定されるのであって、音調によって決定されるものではない。したがって、この考えは誤りであると言える。疑問文とは、もともと相手に質問し、その答えを期待するというもので、両者の間には「聞く権利」と「答える義務」との関係が成立している。上昇調はこれらの関係に対して、UNCERTAINTYを表す役割を演じており、丁寧な表現あるいは相手に好印象を与えるような表現にすると仮定できる。このことは、上昇調が（例えば(17)のような）一般的なYES-NO疑問文に使われた場合、情報を得ることに真の興味を示すというO'Connor & Arnoldの主張とも一致するように思われる⁽¹⁸⁾。

(17) A : →Are you Mr. ↗Graham?

またこのことは次の表現において一層はっきりしてくる。

(18) →Do you mind→handing me the↗book?

これにもし下降調が使われたとすると言い方は丁寧でも、幾分命令的な口調となる。これを裏返せば、先に触れた上昇調の機能を証明することになるとも言える。つまり、この文は相手に本を取ることを要求、あるいはお願いをするものであり、いわば「要求する権利」と「応ずる義務」のような関係がここでも成立している。これに対して UNCERTAINTY を示すことにより、この発話は丁寧な控えめな表現となるのである。特に次のような文では、その文意からも上昇調の機能の欠落した発話では、つまり下降調を使用した場合では、(状況次第では丁寧表現の方が却って皮肉が強くなり命令性が強まることもあるが、普通の状況では) 命令的な口調となってしまう。

(19)→Would you mind→holding your↗tongue?

また、同じようなことが、疑問文や命令文にも言える。

(20) (Hullo darling), →What's your↗name?

(21)→Don't↗cry.

(20)の話し手はただ子供に好意を示そうとしているだけで、特に情報を得ようとしている訳ではない。したがって「質問をする権利」に関して修辭的に上昇調を使い文の調子を弱め、やさしさを表していると考えられる。

(21)においても相手をなだめようとしているのであるから、上昇調を使い命令口調を押さえているのである。

しかし注意しなくてはいけないことは、分析の際、常に文脈を考慮にいれるということである。イントネーションはかなり複雑なものであり、いつも、例えば「聞く権利」と「答える義務」のような前述の関係に対して UNCERTAINTY を示すとは限らない。

(22) A : How did he do that?

B : ↗How did he do that?

この場合、実際に相手に質問している訳ではなく、相手の質問を反復しているのである。したがって、この場合、聞き手が 'How did he do that?' という質問をすることが、この状況において適当かどうかという判断に対して、話し手は、UNCERTAINTY を示しているのである。聞き手の側もこの発話から、自分の質問が不適當であると相手が婉曲的に言っていると解釈するのである。また、相手の言ったことが、よく分からなくて確認する時に、よく上昇調 (High Rise) が使われる。

(23) A : How old is he?

B : →How ↗old?

このような文脈においては、話し手は聞き手が「何歳」と言ったのかどうかについて UNCERTAINTY を示していると考えられる。このことから聞き手も相手が自分の質問の確認をしていると解釈するのである。このように、イントネーション表現にはかなりの多様性があることに留意しておかなくてはならない。

5. 下降調 (疑問文・命令文)

平叙文において下降調が使われた場合、断定を表すのはイントネーションではない。それは、統語構造によって決定される。イントネーションとの関連においては普通の平叙文よりも、疑問文や命令文の方がむしろ問題となるので、ここでは分析を non-declaratives のみに限定して論を進めることにする。

前述の上昇調の場合とは対照的に、疑問文における「聞く権利」と「答える義務」のような関係や、命令文における「何かを要求する権利」と「応ずる義務」のような関係が当然視されるような場合は、上昇調を使うことが不適當、あるいは不必要と考えられるので下降調が使われる。

(24) Do you name the president for us?

これは、授業中に教師が学生に対して行なった質問である。この場合は聞く権利や答えさせる権利は当然あり、学生も当然答えなければならないので、上昇調を使う必要はなく、下降調が使われている。次の例は、医者との患者に対する発話で、(24)の場合と状況は類似している。つまり、医者と患者の間にも、同様な関係が当然とされることが多いのである。

(25) Are you taking any prescription medication.

また、WH 疑問文や命令文は、特に上昇調の場合と対照的となる。

(26) What are you \looking at?

「何、人の顔じろじろと見てるんだ！」と文句を言う場合、答えを期待している訳ではない。もしここで上昇調が使われた場合、間の抜けた発話となり、文句も冗談となりかねない。はっきりと相手にある行為を要求する場合の命令文にも同様なことが言える。

(27) Get \away from me.

「向こうへ行け！」と人を追い払うのに、

(28) Get /away.

では、逃げるものも逃げなくなってしまうし、まさに上昇調の使用は不適當と考えられる。このように下降調は、DEFAULT VALUE という機能上、特に non-declaratives において、上昇調の場合と対照的となるのである。

6. 下降調と上昇調（むすびにかえて）

以上論じてきたように、本論は従来のイントネーション分析とはその解法において大いに異なっている。まず本論では、基本音調を上昇調と下降調の2つのみとし、その意味もそれぞれ UNCERTAINTY と DEFAULT VALUE と定義した。また、下降上昇調（∨）に関しては、従来のように基本音調とは見做さず、下降調と上昇調の融合形（\+／）と仮定

し、特別な意味は付与していない。他の複雑な抑揚型に関しても、2つの基本音調によって分析可能である。

またもうひとつ重要な点は、その解釈の基準を関連性理論に求めたいということである。これにより、イントネーション解釈の一般化が可能となるのである。つまり本論では、イントネーションによって表される様々な意味も、すべて音調の核となる意味と文脈から、関連性の原則に基づいて派生的に生じるものと考えている。

最後に、より複雑な下降上昇調の分析例を挙げ本論を締め括りたいと思う。

(29) A: What a lovely voice!

B: \Yes, | she has a \lovely \voice. (But I don't think much of her as an actress.)

(30) A: I don't think much of her as an actress.

B: \Yes, | she has a \lovely \voice. (Even if she can't act.)

両者とも抑揚型は同じであるが、O'Connor & Arnold は前者には「いやいやながらの肯定」後者には「ためらいがちに反対」と、違った意味を付与し、説明している⁽¹⁴⁾。本論の分析ではこのような例も、一般性を欠くことなく説明できる。(29)においては、まず下降上昇調(∨)の内の下降調の部分で声の良さは認めている。しかしBは他の点に関しては否定的にとらえており「声が良ければ良い女優である」というようなことに関しては上昇調の部分で UNCERTAINTY を示している。聞き手の解釈の過程としてはまず話し手が何に対して UNCERTAINTY を示しているかを関連

性の原則に基づいて探ろうとする。この場合は、舞台を見ていれば明らかに他の才能が不十分であるということが分かるので、ここにおける声の重要性に対して UNCERTAINTY を示していると判断するのである。つまり、「良い女優とは言えない」と考えていると判断するのである。次に下降調の部分と併せて「声はいいが残念ながらいい女優とは思えない」というようなことを最終的に結論として導きだす。これがまさに、関連性の原則に一致する解釈なのである。

(30)では、話し手は良い女優であると信じているので、上昇調ではおかしいために、下降調を使用している。しかし、声以外の他の面が不十分であるということも否めないで、あからさまに反対もできず、ここは上昇調を使い「反対しても差し支えない」ということに対して UNCERTAINTY を示しているのである。聞き手も相手が直接表現を避けているということから、ためらいがちに言っているということを理解するのである。このように、複雑な抑揚型の意味も本論の分析では矛盾することなく一般的な説明が可能となるのである。

註

- (1) 本稿は主に、1993年12月11日、東京周辺地区言語学会 (TACL) で行なった学会発表の内容に基づくものである。
- (2) Sperber, D. and D. Wilson, (1986) *Relevance : Communication and cognition*. Oxford : Blackwell.
- (3) Wilson, D. and D. Sperber, (1988) 'Representation and relevance' In R.M. Kempson (ed.), *Mental Representations : The interface between language and reality*. Cambridge : Cambridge University Press, p. 140.
- (4) Bolinger, D. (1986) *Intonation and its parts : Melody in spoken English*. California : Stanford. p. 164.
- (5) Cruttenden, A. (1986) *Intonation*. Cambridge : Cambridge University

- Press, p. 100.
- (6) Gussenhoven, C. (1983) *A semantic analysis of the nuclear tones of English*. Bloomington : Indiana University Linguistics Club, p. 100.
 - (7) 河野 武 (1994)「関連性とイントネーション」, 『大妻レビュー』第27号, 88 頁。
 - (8) *Ibid.*, 75-89 頁。
 - (9) Imai, K. (1983) 'Intonation and relevance' Paper presented to the Osaka Conference on Relevance, May 1993.
 - Knowles, G. (1987) *Patterns of spoken English*. London : Longman.
 - Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik, (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London : Longman.
 - (10) O'Connor, J.D. and G.F. Arnold, (1973) *Intonation of colloquial English*. London : Longman, p. 58.
 - (11) *Ibid.*, p. 58.
 - (12) Sperber, D. and D. Wilson, *op. cit.*, pp. 59-60.
 - (13) O'Connor, J.D. and G.F. Arnold, *op. cit.*, p. 64.
 - (14) *Ibid.*, pp. 68-9.

Relevance and English Intonation

Toshihiro Okada

Summary

Intonation is too important a subject to be left just to the students of intonation. It should be of great interest to those who study human communication and cognition. Even modern studies of intonation, however, fail to give a satisfactory explanation based on a pragmatic theory, of how intonational meanings are communicated. Pragmatists, on the other hand, tend to underestimate the role of intonation in communication. In this paper, I therefore attempt to elucidate the function of intonation by means of a theory of human communication, *Relevance*.

It is assumed that a variety of complex intonation patterns can be reduced to two basic pitch accents, FALL, and RISE. The advantage of my relevance-theoretic analysis is that it can deal with any intonation pattern with one and the same theory.

My main aim here is to justify the following claims and to show how intonation is used by the speaker and how it is interpreted by the hearer.

(a) FALL : DEFAULT VALUE

FALL is selected when the use of RISE is either uncalled for or inappropriate.

(b) RISE : UNCERTAINTY

RISE contributes to higher-level explicatures in that it signals the hearer that the speaker shows her *uncertainty* as to something that is related to the utterance in question in some way : it is *the principle of relevance* that enables the hearer to determine what that something is and how it is related to the utterance being produced.

(学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程, イギリス文学専攻)